

5月の大型連休中はまずまずの天候に恵まれましたが、4月中旬から下旬は不順な天候で推移しました。また、5月に入って気温が高くなるにつれ、病虫害や鳥獣害の発生も出始めてきております。また、突風や集中的な降雨などの気象による害が見られております。圃場の観察を怠らないように農作物の管理に注意してください。

先週発生している障害事例

1、突風によるマルチのめくれ。

春はマルチ張りを気温の低い日に行いますと、その後の気温上昇により、マルチが緩みシワが多くなります。こうした状況の下で、継続的に強風に晒されますと次第に風の抵抗によりマルチが引っ張られ、剥がれてしまいます。さらに、植えつけられたばかりの苗も折れたり抜けたりする被害を受けます。マルチにタルミが見られたら、土や石などの押さえを置いて下さい。

2、ニンニクの黄化。

連休前後から、ニンニクが急激に黄色くなってきたとの問い合わせが複数件寄せられてきました。現場で状況を確認しましたが、症状を見てもみますと病害によるものではなさそうに見えました。問題の株を掘りあげて見たところ、腐っている根が目につきました。推測ですが、4月12日と22日にそれぞれ約50mmのかなり強い雨が降っています。この雨により一時的にかなりの圃場滞水が発生し、根が窒息死し腐ったために、この影響が一定期間を過ぎてから出てきたものと考えられました。

野菜の根は半日水没状態が続きますとほとんど腐ってしまいます。今回は皮肉なことですが、割合排水の効く畑でかえって被害が出たようです。もともと排水の良くない畑では植物の根は地表面の浅いところに分布していますが、排水の良い畑では、根が深く張っているため、一時の大雨では、かえってダメージが大きくなってしまふのです。



黄化したニンニクと根の状態(腐った根が褐変している。)

野菜の根は半日水没状態が続きますとほとんど腐ってしまいます。今回は皮肉なことですが、割合排水の効く畑でかえって被害が出たようです。もともと排水の良くない畑では植物の根は地表面の浅いところに分布していますが、排水の良い畑では、根が深く張っているため、一時の大雨では、かえってダメージが大きくなってしまふのです。

3、キジの害

葉がかなり食害されているブロッコリ - 畑がありました。通常のアオムシやヨトウムシの食害としては時期的に被害が大きすぎるため疑問を持っていました。近くで作業しておられる方にお聞きしたところ、キジが食べているのではないかとのことでした。この地域は禁猟区のためかなりのキジが闊歩しているとのことでした。春先のため植えて間もないブロッコリーは格好の餌となってしまうようでした。



4、ネキリムシ

マルセイユメロンの巡回で、あるハウスに入ったところ、殆どのメロンの株元が削られたような後がありました。当初はつる枯れ病が発生したため病斑部を削り取ったのだらうと考えましたが、殺菌剤が塗布されていないので、生産者に確認を取ったところそうした作業はしていないとのことでした。再度株元を吟味したところ、ネキリムシによる食害の可能性が高いと判断しました。



メロンは軸が太いので、ネキリムシも食いちぎるまではできかねなかった結果として、このような傷跡を残したと推測されました。こうした状況はかつてミディトマトでも経験したことがありました。雑草がある程度の期間茂りっぱなしにしておいた畑などでは、作付け前にカルボスやダイアジノンなどの土壌害虫用の殺虫剤を使用するようにして下さい。

5、桃の縮葉病

新葉の展開時期になると葉の縮れが顕著になってきます。この細菌性病気の対処法は、落葉期に石灰硫黄合剤の予防散布(散布してもいくらかの発生は避けられませんが)を行うことです。縮葉が見られてからでは打つ手はありません。ただし、この病気で木が枯れることはありません。被害葉が多いと果実の肥大に影響がありますし、病葉が落ちてしまうので樹勢も弱りますので、摘果を強めに行う必要があります。本病は低温期に発生しますので、気温が上昇してくると病勢は沈静化してきます。



桃の縮葉病

6、交配用のミツバチの死滅

今年は寒い日が続いたため、ハウスを締め切りにすることが良くありました。しかし、日射しは確実に強くなっており、密閉したハウスでは、約30分間の晴れ間で、約50℃に達してしまいます。交配用のミツバチは温度に敏感です。活動は14~15℃で開始し、活動適温は20~25℃です。30℃を越えてくると天井ビニールに衝突を繰り返すなど正常な行動ができなくなります。さらに48℃を越えると高温のため死に至ります。低温での致死温度はマイナス5℃といわれていますので、今年の温度経過を考えると、死滅の原因は殆どが高温によるものと思われます。ミツバチの箱は直射日光を受けないよう日覆いを行うとともに、砂糖水や清潔な水を与えます。この場合、ミツバチがおぼれないように必ず足場を作ってやる必用があります。ミツバチは朝早くから農家に代わって、交配作業をしてくれていますので、充分ミツバチの環境に配慮してやりましょう。



巣箱の日覆い

7、ネズミの害

農業とネズミの関係は非常に深いと言えます。残念ながらネズミは農業者にとって、最も退治したいナンバーワンの生き物です。

あるハウスに立ち寄ったところ、ホーレン草の生え方が、非常にまばらとなっていました。畑に表面にホーレンソウの種が点々と見られていましたが良く見ると、ホーレン草の種子の皮でした。生え振りがまばらとなった原因は、ネズミがホーレン草の種を食い散らかしてしまったためでした。こうしたことはカボチャやウリ類の種でも良く起こります。



右列がネズミによる種子の食害

8、馬鈴薯の追肥

今年は低温傾向で、バレイショの芽が上がってくるのが遅れていますが、漸く土寄せ段階になってきています。最近、バレイショの追肥に関する問い合わせが出てきております。

追肥はバレイショの生育状態を勘察して行います。生育が正常であれば、高度化成550を1a当たり5~6kg程度、生育が旺盛であれば加里肥料の単肥を1a当たり2~3kg、やや弱いと感じるときは有機化成A801を使用するか、あるいは、そさい3号と高度化成550を1:1に混合した肥料を1a当たり4~5kg程度施し土寄せします。このときに茎選りも併せて行います。弱い株は1~2本に、生育の良い株で2~3本にします。ただ、茎選りをしなければ、過繁茂で病気になる危険性が高くなるとともに、小芋の割合が多くなります。今年は天候が不順に経過していますので、窒素はやや控えめにし、通風採光を図ってやりましょう。